

初期密典の解脱観

——陀羅尼の変遷をととして——

氏 家 覚 勝

序

ここに取りあげようとする初期密教経典とは、中期の密教経典である『大日経』や『金剛頂経』が成立する六世紀以前に成立した雑密経典を指す。『大日経』や『金剛頂経』にくらべると、陀羅尼とか神呪（密呪・真言）は説かれているけれども、組織的な曼荼羅はほとんど説かれていないし、修法のくわしい規定もみられない。その意味では、はたして雑密経典のすべてを密教経典といえるかどうか、はなはだ疑問である。雑密の経典には陀羅尼または神呪が説かれているために、これを陀羅尼神呪経典と規定する目安にされているようである。しかし陀羅尼や神呪は一般の大乗経典中にも多説されているから、これのみで陀羅尼経典をとくに密教経典とは呼べない。この問題は未解決の問題であり、ここで深く立入ることはできない。密教では神呪（真言）または神呪化した陀羅尼をとくに重視する。すなわち真言の読誦を修法体系の

中に織りこんで、これを儀軌どおりに実行することによつて即身成仏のごとき宗教理想を実現できるとする。そこで、いまはとりあえず、陀羅尼・神呪を一經全体の基調にしている初期の陀羅尼神呪経典を慣習どおりに密教経典とみなして、そこに展開されている陀羅尼・神呪を中心に表題の考察を進めたい。

一

大部の密教経典を成立史的に俯瞰して初期の密教経典における特色や問題点を浮き彫りにした最近の研究に、松長有慶博士の『密教経典成立史論』がある。このなかでは問題点がつぎのように整理されている。すなわち六世紀以前に漢訳された初期密教の経典は現世利益を多く説き、成仏に關説した例はとるに足らない。しかし七世紀の中葉に漢訳された経典の中に陀羅尼読誦と成仏が不可分に結びつけられている例があり、これが『大日経』や『金剛頂経』をはじめとする中期

の密教經典の修法目的である成仏につながるものである（取意）、とされている。ここに指摘されているとおり、当初はただ除災招福を目的とするのみであつた雑密の神呪の読誦などに、正覚・解脱の目的がのちに盛られてくるようになる。この傾向は一部の漢訳にかざられるというよりも、原典にさかのぼつて共通の原因が考えられるように思われる。

この問題についてわたくしはつぎのように推定する。ひとつは、最初期の密典において、成仏または解脱を目的とするダーラニー（陀羅尼）と現世利益を目的とする神呪とは別々に説かれていたこと。もうひとつは、この別々に説かれていたダーラニーと神呪とはやがて同化して両者は区別がつかなくなるが、同化したがゆえに神呪にもダーラニーがもつていた成仏の目的が加えられるようになったこと、の二点である。

この二点にもとづいて以下考察を進めていきたい。まず最初期にぞくする雑密經典の中で、ダーラニー（持、陀羅尼）を説いて神呪を説かない經典のひとつに三世紀に支謙によつて訳出された『無量門微密持經』がある。この經典のダーラニーは前にも取りあげたように（拙稿「護法と總持」密教文化一二二）、念仏を内容とするもので、菩薩が種々の仏の功德を列挙した持句を思念することによつて智慧の清浄心地を開発して、無上の正等覺にいたることを目的とするものである。

初期密典の解脱觀（氏家）

ここでは仏を思念する方法として持句が説かれるが、これのちの訳では神呪化される（例、劉宋求那跋陀羅訳に「現在諸仏説如是神呪四十八名、大正一九、一〇一三下）。しかし支謙訳の『微密持經』や東晋仏陀跋陀羅訳の『出生無量門持經』では、難解な語句ではあるが意識されていて、それぞれが仏の功德・威光を示している（不動寂靜、無垢清淨、光明離垢、大勇など東晋訳）。したがつてこのような持句にもとづいて諸仏を憶念し、自心を淨め、ついで衆生国土の清淨から仏国土の建設を目指すのがこの經の趣旨である。そのことは四清淨法門として東晋訳に、一、衆生清淨（人淨）二、法淨三、弁才淨（慧淨）四、仏土嚴淨（仏国清淨）として示されている（かつこ内は支謙訳）。このようにこの經のダーラニー（持）説は正覺を目的としているから、そこにはとうぜん業・煩惱からの解脱を含んでいる。それは持を学ぶことによつて、一、十方諸仏護念二、離諸魔事三、惡罪業障疾得清淨四、無斷弁才（いづれも東晋訳）の四功得が得られると説かれていることから知られる。このほか、この經には、持を速やかにえるための四法行の第一に *ḍa*, *ṛa*, *va* などの八字義を理解することとか、無量壽仏が往昔この持を聞いて專精求學し無量門出生之持を人々に説いて無上菩提心をおこさせたとか、經末に持を行ずる者を雪山の八大神（八大鬼）が守護することを説くなど、他經典と比較して陀羅尼説の發展々開を知る上で注意す

べき内容が多く盛られている。

つぎに同じく支謙訳とされる陀羅尼經典として、『八吉祥神呪經』を取りあげる。この經はつぎに取りあげる『華積陀羅尼神呪經』や『持句神呪經』とともに、支謙訳と決定することはやや疑わしい。しかしさきの『微密持經』と同様、ダーラニー（陀隣尼）のみ説かれていて、神呪は見られない。その陀隣尼も、八仏の名号を聞いて受持し、他の人々のためにその意味を解説したりすることによつて得る正覺を内容としている（必当得無上平等之道、常遇陀隣尼、大正一四、七二下）。

二

同じく支謙訳の『華積陀羅尼神呪經』には神呪が説かれていて、その神呪は「華積陀羅尼呪」(guspakṣa-dhāraṇī)と呼ばれている。しかしこの神呪は漢訳では音写されていて意味不明のようにみえるが、チベット訳によると、牟尼の威光 (muneprabhāva) とか仏慧の念持 (buddha-matidherye) を示す語句が列挙されている（北京版七、二四一—三）。したがつて、これらはさきの『微密持經』の持句と同様に、仏徳の威光・贊美の句ととれないこともない。事実この神呪の前後には、諸仏・如来にまみえることおよび念仏の修習が説かれている。チベット訳では神呪が説かれたあと「獅子奮迅よ、人あつてもしこの華積ダーラニーの名と文字と句とをすべて知りえんとする者は、春・夏・秋の白月の八日から十五日に

かけて念仏を修すべきである。昼に三度夜に三度思念し、如来を心の一点に集中して世尊に香・花・灯・燭をもつて供養するとき、仏世尊が蓮華蔵の獅子座に着座して法を説かれているのを見る」と説かれている。これにより華積ダーラニーとは、念仏にもとづく見仏ないし正覺を目的とするものであることを理解する。しかし後世の陀羅尼神呪を知る眼から見ると、「陀羅尼呪」という表現は、仏隨念のための語句が神呪化されていて、それにダーラニーが同化しているようにも受けとれる。したがつて、このばあいのダーラニーは内容は念仏であるが、表現上はそれが真言陀羅尼に傾いている、いわば陀羅尼が神呪化される過渡期の陀羅尼説と見てよいであろう。

支謙訳の經典として最後に『持句神呪經』を取りあげる。以上の諸經と異なつて、この經には神呪のみが説かれている。しかもその神呪は、天・竜・鬼神をはじめ虎・狼・毒獸にいたる有害者から身の安全を確保する守護呪として説かれている。したがつて、これは仏説として説かれてはいるものの、解脱や正覺を目指すものではない。もとより業障からの解脱も説かれていない。しかしここに説かれるような神呪が、守護呪としての神呪の本来の姿をうつしているように思われる。知られるとおり、大乘經典でも初期のものには念仏・念法としてのダーラニーと神呪とは別して説かれていて、

『法華經』の「陀羅尼品」や『大集經』などに説かれる神呪は、『持句神呪經』のように、惡鬼・羅刹などから身を守るための守護呪として説かれている。それによつて正覺や解脱がえられるとはされていない。しかしのちの陀羅尼神呪經典になると、この守護呪にも正覺・涅槃の成仏の理念が加えられてくる。そこで前述の第二の推定にいたる。すなわち一方で神呪の性格をもたないダーラニーが説かれ、他方でダーラニーの性格を有しない神呪のみが説かれるということから、もともと別して説かれていた兩者が、のちに『華積陀羅尼神呪經』に見られるような陀羅尼と神呪の準同化の過程をへて同化した結果、種々の神呪經典に見られるような複合的な性格を持つ「陀羅尼神呪」が成立していったのではないかと考えられる。

三

『微密持經』に見られるような仏隨念のための句が神呪化され、それにもなつて仏隨念を内容とするダーラニーまでが陀羅尼呪として神呪と同一視される経過については、かつて論じたことがある（前掲「護法と總持」参照）。その結論を一口で言えば、念仏とか念法のための手段としてのダーラニー句（格限定語）が神呪化すると同時にダーラニーに同化して、ダーラニー句（同格限定語）すなわち「陀羅尼神呪」が成立したということである。守護呪とダーラニーの兩者も同じ経過

をたどつたと考えられる。すなわち守護呪とダーラニーとの關係は、陀羅尼（弁才）の体得者である法師の守護呪が陀羅尼（弁才）に同化したか、または陀羅尼（弁才）が神呪を吸収して自らも神呪化したものと思われる。

神呪のもつ複合的な性格については、松長博士の研究にも論ぜられていゝところであり、くわしい考察はそちらにゆずらせていただく。そこでいまは、雜密の陀羅尼經典の推移と同じように、当初は並説されて關係を持たなかつたダーラニーと神呪がのちに同化したために、ダーラニーの持つていた正覺・解脱の目的を神呪も持つにいたつた例を『大集經』から取りあげて検討してみたい。

『大集經』六十卷のなかでも、初期の成立と見られる經の前半に説かれるダーラニーは同じく前半中に説かれる神呪とは別のもので、經説の憶持としてのダーラニーである（拙稿「大集經におけるダーラニー説」印仏研二六―二参照）。憶持のダーラニーは第二品の「陀羅尼自在王品」に八陀羅尼説として展開されており、そこでのダーラニーは、同時に説法弁才の性格をつよく持つてゐる。この説法弁才のダーラニーは、菩薩が衆生に仏の教えを説き示し、正覺に向わせる菩薩行の一環として説かれるものであるから、これが八陀羅尼に先立つ三十二の仏業と深く関連していることが分かる。

ところで『大集經』の後半部分を中心に多説される神呪

は、守護呪としての性格と合せて、正覚を目的として有している。その一二の例をあげると、第九品の「宝幢分」（別訳『宝星陀羅尼經』）に説かれる「宝星陀羅尼」は、諸鬼神や惡獸からの保身および病氣や災害からの防護、さらには五穀豊熟といった除災招福と合せて、無上正等覺の護得がこれを誦説することによつて得られるという（大正十三、一三三上、五四三中、梵文四〇ページ）。同じ例は第十四品の「日藏分」にも見られる。ここに説かれる神呪に「日眼蓮華陀羅尼」と呼ばれるものがあり、この陀羅尼を誦説することによつて、一切の煩惱や惡敵から身が守られるとともに無上正等覺より退転することがない、云々と説かれている（大正十三、二四一上、北京版三六、一八四—三）。

四

このように神呪が除災招福と同時に正覚を目的とする背景には、ダーラニーと呪との同化を想定せざるを得ないように思われる。「陀羅尼自在王品」の八陀羅尼には、淨声光明・無尽器・無量際などのダーラニーが説かれるが、それらはいずれも教法の憶持と、それに基づく說法弁才の無量無尽の性格を有するものである。これがどうして正覚の目的をその中に含みうるかを考えて見ると、さきにも一言したように、このダーラニー説に先立つ章に三十二の仏業が説かれていて、陀羅尼はその一環として説述されていく事情を見出す。三

十二の仏業とは、十力・四無所畏・十八不共法であるが、これらは第三の「宝女品」にも説かれている。そして、そこでは、十八不共法のほとんどに入一切音声、無辺門（成就）、法灯などのダーラニーが読みこまれている（前掲「大集經のダーラニー説」参照）。それらのダーラニーは、たとえば第一の身無失では「一切の問者に記を授けて疑いをなくさせ、普光明三昧をよく修せるがゆえに入一切音声ダーラニーを知つて、つねに絶え間なく如来の正しい句をもつて法を説く」（チベット訳）とある。第二の口無失では「幻化王三昧を修し、無辺門成就ダーラニーを知つて、如来の一切の処と相と相好と毛孔とから不可思議微妙の仏法の音声を出す」云々と言われている。これを見ても分かるように、如来の不共法とは如来のみに具わるすぐれた能力・徳性であることは自明であるが、そのすぐれた功德を一切衆生におよぼして、かれらを攝取利益せしめるところに仏業としての意義を持つものである。そしてその衆生の攝取とは、いきつくとくところ衆生に如来の智慧を得させ解脱せしめることを目的とするものであることは明らかである。そのことは「陀羅尼自在王品」の十八不共法のうちの慧無減に「如来（の智慧）が無減であり完全無欠であるように、そのように一切衆生もまた智慧無尽とさせんがために法を説く。これが仏・如来の二十五番目の業である」とか、解脱無減に「如来が現等覺するとおりに、その

とおりに如来は他の衆生や人々に法を説く。これが如来の二十六番目の業である」(北京版三二、二九八―四一五)とされていることから推察できる。

八陀羅尼の菩薩行もまたこのような仏業の精神をよく發揮するものであるがゆえに、「宝女品」で十八不共法のそれぞれに同じダーラニーをもつて説明されたものと思われる。このダーラニーと如来の不共法との不離の關係が『大集經』の後半の神呪にも受けつがれていく。そのため神呪が先述のごとき豊富な内容を持つにいたつたと見てよい。それを支持する事例は、『大集經』第十一品の「虚空目分」に説かれる法目または淨目陀羅尼と呼ばれる神呪に「能く大明をなし、一切の煩惱を乾焦し、如来の十八不共法を獲得せしむ」(大正十三、一五五中)とあるのをあげることができる。この「虚空目分」は相当するチベット訳もなく、前半三十巻の中でも異質の品とされているが、神呪による十八不共法の獲得は「陀羅尼自在王品」や「宝女品」の不共法の教説を予想しなければ理解しがたいものである。このことは、一大叢書としての『大集經』が陀羅尼説を中心にまとめられていく背景を暗示しているように思われる。それはともかく、以上で『大集經』の後半部分の陀羅尼神呪も、前半部分のダーラニー説と関連するがゆえに神呪にもとづく正覚・解脱を可能にするものであることが理解された。

『大集經』は陀羅尼神呪を説くと言つても、これを密教經典と同列に扱うことはできない。ところで、除災招福しか説かなかつた神呪經典の神呪に正覚または成仏の理念が織り込まれていく背景には、念仏ないし見仏を内容とするダーラニーと神呪との同化を予想しなければ解明しにくい点がある。同じことが『大集經』の前半部分と後半部分に説かれるダーラニーと神呪との關係についても言えるわけである。

むすび

結論を言えば、初期の雑密經典の一部は念仏にもとづく見仏・作仏を目的とするダーラニーを説き、それと密接不離の關係をもつて業障からの解脱すなわち成仏を経の基調としていた。一方正覚・解脱を説かない神呪經典もあつて、この方は除災招福のみを目的としていたが、この神呪もやがてダーラニーと同化してダーラニーが持つていた成仏の理念を自らの目的の中に吸収した。それが一因となつて、後世の多くの陀羅尼神呪經典は、現世利益から正覚にいたる複合的な性格を持つにいたつた。

(高野山大学助教授)